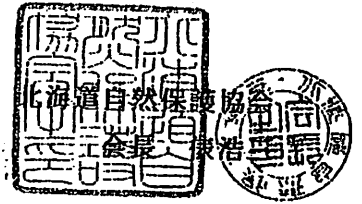


千歳川流域治水対策検討委員会
委員長 山田家正様

1999. 5. 10

(社)



千歳川流域の治水対策についての「中間まとめ」に対する意見書

千歳川流域の治水対策の検討につきましては、大変困難な作業にもかかわらず、長期間に渡って真摯にご検討いただき深く感謝申し上げます。

先日は、千歳川流域の治水対策についての「中間まとめ」をお送りいただき、ありがとうございました。

種々の制約のある中での「中間まとめ」につきましては、その内容を高く評価しておりますが、最終的な提言書の取りまとめに際し、さらに下記の点に付いてご配慮いただければ幸いに存じます。

これらは、拡大会議に参加して申し述べた意見や、今までに提出した意見書、さらに検討委員会や拡大会議の論議経過などを踏まえてのものです。

記

1 治水対策は「石狩川の全流域内での整合性」を図って進めることを強調すべきである

先日、江別市議会は、合流点対策としての「石狩川河道移設案」などに反対し、さらに「ミニ放水路計画（新遠浅川方式）」を引き続き検討するようにとの決議を行っている。

しかし、流域内の住民の利益のために、洪水に関係のない流域外の住民に犠牲を負わせることは、千歳川放水路計画と同じような膠着状態を再びもたらすだけで、もはや許されないことである。

また「下流に位置する江別市のみにも多大な影響を負わせることなく、上流や中流域における一層の流域対策が必要である」としているが、これは当然のことながら千歳川流域のみならず、石狩川全流域を含めて考えなければならない問題である。

たとえば「中間まとめ」では、千歳川の内水氾濫対策として「森林の保全・強化による保水機能の向上」に触れているが、これらは「石狩川とその支流の流出抑制対策として広範囲に有効に機能するもの」として位置付けるべきである。

なお、合流点の水位低下対策として当協会が提案してきた、石狩川河口ショートカット、流域の森林保全、などを組み合わせる方法によれば大規模な合流点対策は不必要であり、江別市への負荷は著しく軽減される。

2 千歳川放水路計画およびミニ放水路計画（新遠浅川方式）は廃止する表現をさらに強調すべきである

「中間まとめ」の「全体の内容」から解釈すれば、千歳川放水路計画およびミニ放水路計画（新遠浅川方式）が復活する可能性はないと判断できる。

また「中間まとめ」は、委員の意見が一致しない現状において、その結論に限界があることは理解できる。

しかし、そのことを勘案してもなおかつ、知事や開発局が「中間まとめ」の趣旨を正確に受け止めることができるように、廃止についての明確な表現を希望する。

これらの流域外対策の復活の期待を残すことが、代替案（流域内対策）についての真摯な検討の妨げになるであろうことは、検討委員会や拡大会議の論議経過などをみれば明白である。

3 治水対策については多様な選択肢の可能性を残しておくこと

「中間まとめ」における具体的な治水対策については、時間的な制約や検討委員会の性格などから、技術的な部分で細部に渡った検討はなされていない。

特に以下についての検討は不十分であり、まだ種々の課題が残っている。

したがって、これらのことを含め治水対策については、多様な選択が行える余地を残す表現を加えるべきである。

基本高水流量（計画洪水流量）の見直し

（カバー率100%の問題など）

千歳川の堤防の嵩上げの可能性

（堤防の強化を含む）

石狩川河口ショートカットの効果

（河道切り下げを含む）

締切水門の必要性についての疑問

4 合流点対策は幅広い視野から検討されるべきこと

今後設置されるであろう「新たな検討の場」では、残された課題を含め幅広い視野にたって検討すべきである。

合流点対策は「合流点の水位を下げる」ことが目的であって、合流点の工事方法の検討のみが目的であってはならない。

5 その他

総合治水対策によって得られる安全度を「中間まとめ」では1/20としているが、試算方法を一つだけに限定すべきではない。もっと安全度が高い（1/100以上）とする自然保護団体の主張についても付記すべきである。

標準的手法を金科玉条にして見直しを拒否する硬直的姿勢は適当ではない（資料参照）。

以上